

《修士論文要旨》

縄文時代の墓制についての研究 —頭位方向について

綾 香奈江*

はじめに

今日まで、縄文時代の頭位方向についての解釈は抜歯との対応関係から出自を表していると考えられてきた。しかしながら頭位方向と血縁性は関連性がなく、また抜歯と血縁性についても信憑性に欠けるという結論が卒業論文で得られている。さらに他の研究者による頭位方向と抜歯(=出自)についての解釈について検討があまり成されていないのが現状である。そこで修士論文では、抜歯以外の観点から頭位方向の在り方について傾向を求め、また周辺の遺跡と環境との対応関係がないかについて検討を行なっていくことにする。

1. 分析対象

分析対象は次の条件を満たすものに限る。①10個体前後の遺体が出土していること。②埋葬の時期がはっきりとあること。③遺体の頭位方向が明示されていること。以上の条件に基づき、資料と用いた遺跡は宮城・青島貝塚、福島・三貫地貝塚、千葉・貝の花貝塚、同・西広貝塚、同・加曾利南貝塚、同・宮本台貝塚、同・園原貝塚、同・菊間手永貝塚、茨城・三反田貝塚、同・冬木A貝塚、新潟・堂ノ貝塚、長野・北野貝塚、滋賀・滋賀里遺跡、岡山・津雲貝塚、熊本・沖ノ原貝塚の計15遺跡である。

2. 研究方法

報告書の図面をもとに頭位方向を算出した。算出方法は頭頂骨と背骨および骨盤の中心とを結び体軸方向として求めた。方位は北を始点として時計回りに角度を定めた。考察は、埋葬姿勢、性別、年齢、時期、周辺環境の項目から行った。

3. 結果

15遺跡のうち頭位方向が確認できた事例は380例存在した。

無極型：堂ノ貝塚・北村遺跡

単極型：青島貝塚・三反田貝塚・冬木A貝塚・津雲貝塚・加曾利南貝塚・宮本台貝塚

双極型：貝の花貝塚・滋賀里遺跡・祇園原貝塚・三貫地貝塚・沖ノ原貝塚

三極型：菊間手永貝塚・西広貝塚

頭位方向には林が述べた無極型・双極型・三極型の偏りの傾向と、今回新たに加えた単極型による偏りがあることが確認できた。しかし、同じ極であっても偏りの方向は異なっており、地域

平成25年度 *文学研究科文化財史料学専攻

ごとの傾向を捉えることはできない。すなわち、頭位方向は抜歯のように全国的な統一があるわけではなく、むしろ各遺跡の異なる指標をもとに定められているといえる。結論は以下の通りである。

①事例数が10以下の場合、頭位方向の傾向を捉えることは困難である。しかしながら少数であっても、それぞれ頭位方向の様相が異なるため参考として使用することは可能である。また事例数が多い場合、広範囲に頭位方向がみられるようになるため、折線グラフなど別の分析方向を使用する必要がある。

②双極型には東西南北の1方位に2つに分かれている。しかしながら三貫地貝塚のように密度が顕著である場合と、貝の花貝塚などのように、2つのクラスターが近い場合がある。三極型についても、3つのクラスターは、同一方向を向いている。

③頭位方向は、埋葬姿勢・性別・年齢のどれとも関連はみられない。時期については時期による各遺跡の傾向は晩期以外にはみられない。しかし各時期をまとめた傾向として、中期では北、南東、西といった広い範囲にバラつき、三極型の傾向である。後期には、より全方位にバラつく無極型である。後-晩期は後期の傾向を受け継いで全方位にバラつくが、1方位に極端な偏りがみられる単極型の傾向をみせる。晩期は、全方位にバラつく傾向はなくなり、北東と北西といった対象方位に偏りをみせる双極型の傾向である。

④頭位方向は、周辺の影響されている可能性がある。しかしそれが自然環境からであるか、周辺遺跡によるものであるかは確認できなかった。特に山脈地に囲われている場合、遺跡よりも自然を重視しているようにみえるが、千葉県のように山脈地に囲まれていない場合は、遺跡間による影響が伺える。

おわりに

頭位方向が社会組織を表していた可能性はないわけでないが、現状では、それを裏付ける根拠は皆無である。今後の展望としては、周辺環境との関連が、自然によるものであるか、遺跡によるものであるかを研究する必要がある。これが遺跡によるものであった場合、頭位方向が社会組織を表していたと議論づけることも可能かもしれない。しかし遺跡間の交流についての研究は難しいため、人骨だけでなく遺物による検討も必要である。